

(社) 東洋音楽学会関西支部

支部だより 第13号 (1992-09-07)

Newsletter of the Kansai chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のご案内

東洋音楽学会関西支部 第160回定例研究会

と き 1992年9月19日(土) 13:30~16:00

ところ 大阪音楽大学K号館 403教室

〒560 豊中市名神口1-4-1 TEL 06-865-0545

交通 阪急宝塚線庄内駅東側より阪急バス22系統「上津島」下車

13:30~15:10【連続講座】“研究の過去・現在・未来”

シンポジウム『沖縄における研究の過去・現在・未来』

パネリスト：小林幸男(京都教育大学)

長方正博(相愛大学)

—— 休憩 ——

15:20~16:00【研究発表】

『四万十川上・中流域のくらしと音楽(3)』

～高知県梶原町松原地区』(神戸大学民族音楽ゼミ共同研究)

発表者：桜井 寛(神戸大学大学院)

司会：未定

会場：渡辺浩子

東洋音楽学会関西支部 第161回定例研究会・日本音楽学会 第242回例会

(今回は日本音楽学会支部例会と合同)

と き 1992年12月12日(土) 13:30~

ところ 神戸大学教育学部音楽棟1階 C-111教室

〒657 神戸市灘区鶴甲3-11 TEL 078-881-1212 内線7238

交通 阪急六甲駅、またはJR六甲道駅、または阪神御影駅から、市バス36系統「神戸大教育学部」下車

【研究発表】

『唐楽六調子における旋律法と調との関係について』

～箏築の技法をめぐる～

発表者：辻尾真弓(四天王寺高校講師)

【連続講座】“研究の過去・現在・未来”

～内容未定～

司会：未定

会場：桜井 寛

琉球音楽と一口にいても、本来宮廷音楽である「古典音楽」「節歌」と他の民間伝承の音楽とは性格も研究方法も異なるところが多い。今回は後者に焦点を当てる。

音楽学の側からの琉球音楽研究は、戦前の山形盛彬を別としても、戦後は金井喜久子・久保けんおらの沖縄・奄美出身者によって開かれたといつてよい。この時期の研究は採譜による曲の紹介と、本土民謡に対し際だった特徴に見える音階に関する論が中心であった。

沖縄の復帰前後になると、本土の研究者の渡航も増え、研究は新たな段階に入った。杉本信夫は沖縄各諸島を網羅した初の楽譜資料集を出版し、また特に九学会連合の調査等を通じて、内田り子・小島美子・松原武美らによる詩型＝旋律型・地域的特徴・共同体と歌唱など様々な側面からの研究が飛躍的に進展した。また文学の側からといえ、小川学夫らの相当に音楽接近した奄美民謡の研究も、功績が大である。

琉球音楽研究の第3期中核ともいべきものは、東芸大・国立・武蔵野・東海大等によって進められたグループによる民謡採集活動であろう。このうち東芸大民族音楽ゼミナールの活動がほぼ全諸島にまたがって最も徹底的なもので、その成果はNHK『日本民謡大観（奄美・沖縄）全4巻や同ゼミ出身者の論文・報告で示されつつある。

琉球音楽は、収集という面では日本の他地域と同様、時代の波を受けて、あまり今迄以上の成果は望めない。しかし、大系的な収集に比して資料発表や研究発表の数はまだまだ圧倒的に不足している（特に沖縄）と言ってもよく、むしろ研究はこれから本格的な展開を迎えるであろう。

長方正博

日本本土（ヤマト）から見た沖縄（ウチナー）の音楽は、あの沖縄音階という語の～日本に存在するという音階の中で唯一地名が冠せられている～響きが示すようにマイナー音楽である。ところが、そのスケールを下げてウチナーから見ると、ウチナーの古典音楽が幻の琉球王国の国家的公式音楽となり、ヤイマ（八重山）やミヤグ（宮古）などの、よりマイナーな音楽が存在する。そしてさらにスケールを下げるとどうなるかと言うと、ヤイマのスケールからはマイナーな島の音楽が見え、またその島のスケールからもマイナーな音楽が現われる。しかしそれが究極のマイナー音楽かと言うとそうではなく、案外ヤマトやウチナーに連なるものであったりもする。巨大なスケールでは微分可能に見える沖縄音楽も、ミクロのレベルでは至る所に微分不可能な曲線が存在するのだ。

私達は、これまで沖縄音楽を結晶体だと思ってきた、「沖縄文化」という大地の圧力が生み出した音楽的鉱物であるかのように。だが実際は、私達の身体や社会を含む現実の諸組織が揺れ動きつつ多様な形態を作り出すように、現実の沖縄音楽も流動的に多様な形態を生産する。だから結晶状のものから、液状のものや雲状のものまである。そんな多様性を作り出す分子の運動を一様な接線で囲い込むことができるだろうか？

沖縄音楽にはそうした問題が存在する。だが、それは障壁ではない。それは新たな思

考への入り口、停滞状態からの脱出口だ。幻想としてではなく、現実としての沖縄音楽を語るために、今私達はその前に立たなければならない。

## フィールドワークレポート

「聞き書き」フィールドワーク

山田智恵子

日本の伝統芸能である「文楽」を研究している私には、フィールドワークレポートというのはその任にあらずという気がするが、広い意味で考えれば、似たところもあるように思う。それは、演者自身のことばを、本人があるいは聞き手がかきしるしたもの、所詮「芸談」へのアプローチのしかたである。日本の芸能のなかで、「文楽」についての芸談は多いほうの部類にはいるし、芸そのものを伝承してきたわけだから、それらは研究者にとって貴重な資料である。

ところが、そうした「芸談」のなかの演者のことばは、じつに難解なのである。もちろん、難解でない部分もあるが、それは修業のつらさとか師匠のエピソードなどであって、最初、おろかな私はそんなことは音楽の研究には直接関係はないと思い込んでいたのであった。じつはそうではなく、なにげないことばのなかに、伝承上の重要な意味があったりするのだが、それに気が付いたのも最近のことである。難解なことばのほうは、これはもう直接音楽について語っている部分なので、なんとかその意味を理解したいのだが、まるで異人種かとも思えるほどちんぷんかんぷんであった。しかたがないので、そのままうちやっておいた。

何年かたって、別の人物が語ったことばで、はっと以前の疑問が突然解けたことがあった。なぜ今まで解らなかつたのかと考えた時、一つ気づいたことがあった。それは演者は演者のことばで修業の体験から得たことを語っているのに、私はそうした体験がなく、演者とは全く別のフィールドでものを考えていたのである。その私が多少とも演者のことばがわかるようになったのは、繰り返し繰り返し音を聞いて採譜することによって、音の記憶の蓄積ができたことによると思う。

演者のフィールドで語られることばを理解するためには、鑑賞者あるいは傍観者的立場でなく、演者とおなじフィールドに立たねばならないであろう。その意味で「芸談」や「聞き書き」へのアプローチは、フィールドワーカーの行為に似ているかもしれないと思う。

## 沖縄地区情報

### ◆沖縄地区研究会報告

第6回定例研究会 1992年6月20日(土)

- ・招待講演「琉球民族音楽発声と声楽発声の比較研究」宮原卓也(沖縄県立芸術大学)
- ・研究発表「沖縄の〈エイサー〉と社会・経済構造との相互規定関係」  
山本宏子(調布学園女子短大)
- ・研究発表「新しい湛水流について」祖慶 剛(湛水流伝統保存会)

◆沖縄地区定例研究会の開催予定は以下の通りです。

第7回定例研究会 1992年10月中予定 会場：沖縄県立芸術大学

第8回定例研究会 1993年2月中予定 会場：同上

◆沖縄地区連絡会は今年9月で発足3年目を迎えますが、この機会にあたり、「支部」化をめざして準備を進めています。8月末には規約等の具体的な案文が、理事の金城氏より関西支部の各理事に提案されました。内容の詳細は省略しますが、次の通常理事会および総会で承認されれば、来年9月の平成5年学会年度から支部としての活動が始まることとなります。

◆沖縄地区連絡会関係の問い合わせ先

〒903 那覇市首里当蔵町1-4 沖縄県立芸術大学音楽学部 音楽学学科室内  
TEL 098-831-5034 (金城)・5044 (久万田)

#### 新入会員

杵家弥久輔 (大阪芸大在学)

大山伸子 (沖縄福祉保育専門学校非常勤講師・沖縄県立芸大研究生)

#### 関西支部役員の変動

白比邦子 (例会・広報) → 辞任。

#### 編集室より

編集担当 桜井 寛

第160回例会の会場が国立民族学博物館から大阪音楽大学に変更になりました。お間違いのないよう願います。

なお第161回例会 (日本音楽学会と合同) の研究発表は追加も可能です。また時間や連続講座の内容など未定の部分が多くなっておりませんが、後日改めて詳細をお知らせしたいと思います。

今回もお忙しいなか、原稿をお寄せ下さいました皆様に心より御礼申し上げます。また、連絡・通信などさまざまな方々よりご協力いただき誠に有難うございました。

#### 支部関係の問い合わせ先

関西支部 〒559 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学音楽学合同研究室内  
TEL 06-612-5900 内線331

#### 定例研究会・支部だより

〒657 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学教育学部岩井研究室  
TEL 078-881-1212 内線7238